

命にかへ子種授け給へ

——説経節における「申し子」の位相——

藤 掛 和 美*

“Moshigo” in Sekkyō-busi

Kazuyoshi Fujikake*

はじめに

ただ今語り申す御物語、国を申さば丹後の国、金焼地藏の御本地を、あらあら説きたて広め申すに、これも一度は人間にておはします。人間にての御本地をお尋ね申すに、国を申さば奥州日の本の將軍、岩城の判官正氏殿にて、諸事の哀れをとどめたり。(1)

説経「山椒太夫」の冒頭部である。本文は寛永末年ごろの刊本であるが、中世に発生した民衆語りの名残りを充分に伝えている。神と仏と人とが、地平を同じにし、親しく交わったのが中世であった。国家的・公式的儀礼の中心であった古代の神々に比して、中世の神は仏といとも易く習合し、民衆の身近に降臨して人々の

日常性と親密に関わった。神の本地は仏であり、そして人間が、神の本地にも仏の本地にもなりえた。

しかしかかる結びつきは、換言するならば、恋愛も、出世も、お家繁昌も、すべからく人々の運命は神仏によって掌握されるということでもあった。人々は神仏に熱い願をかける。

かかる中世における神仏との関わりの中に「申し子」も存在する。

室町時代物語大成全十五卷（内補遺二卷）(2) 所収の四八〇本、『神道集』所収の五〇本、『説経正本集』全三卷(3) 所収の六六本、合計五九六本の作品を調査し、それらの中に「申し子譚」を求めて、主に次の二点について論ずる。

- (1) 辞書類記載の語彙「申し子」の意味について検討する。
- (2) 各作品の「申し子譚」の表現内容を比較検討することにより、殊に説経節諸作品における「申し子譚」の特徴を検証しながら、ジャンル説経節の位相を焙り出そうとする。

一 「申し子」とは

本論に入るに先立って、本稿で扱う「申し子」の意味内容について説明しておく。

* 人文系列－文学 (Department of Liberal Arts and Sciences－Literature)

はりまのくに、あかしのさへもんのぜう、しけたかと申人おはしけり、才智、才覚、芸能、人にすぐれて、かうの人なり。弓矢をとりても、まさる人ぞなき。みちのくにのぬしにて、近国^{きんこく}にはおそれけり。なに事も、こころにとほしきこと、をはしまさず。(以上①とする。)

さて、御とし、たけ給ひけるまで、御子一人も、おはしませぬ事を歎き給ひて、(②)

熊野参詣し給ひ、本宮、聖城殿に通夜申させ□^まひけるに、(③)おにかわらを、たまは□^り□^{ふと}ころに、をさめけると、示現にこうむりて、下向し給ひけるほどに、(④)

ほとなく、きたの御かた、月のさわりと、まりて、十月と申に、男子をまうけ給ひけり。あたりも輝くほどの、いつくしき若君にてぞおはしける。(⑤) (4)

「天文廿三年」(一五五四)の書写年を奥書にもつ写本「あかしの三郎」の冒頭部。最も一般的な「申し子譚」で、①～⑤のパターンをとる。これを例にして、「申し子譚」の型を示すと次のようになる。

①ある所に長者(武勇・芸能・才智才覚に秀れた人の場合も)がいる。(場所・人物名は固有名詞が殆ど。やがて生まれる子Ⅱ主人公の親の素性を叙す)

②しかし、その夫婦には、年経ても子どもが生まれず、嘆く。

③そこで夫婦は、神仏(観音、薬師、如来、明神、毘沙門等諸神仏があり、多くが固有名詞で出る)に参詣し、子どもがで

きるよう(子種が授かるよう)祈願する。この「あかしの三郎」のように簡単に成就する場合もあるが、なかなか叶わず、

夫婦の前生の悪業を神仏が持ち出して拒否する場合もある。

この際には、より激しく祈願を掛けたり、献上物を多く差し上げたりする。又、生まれた子どもと引き替えに、何年か後に親の生命が無くなるという予告を神仏がする場合もある。

それでもよいということで子種が授かるよう願う。この神仏と人との応酬、殊に、「前生譚」及び「不幸予告」の有無が「申し子」譚における表現量の多少に関係する。後に問題にしようとする要素である。

①神仏が願いを聞きとどける。ここでは「おにかわら」を賜わるのだが、「御示現」の結果「蓮華」とか「こがねの玉」等を賜わる「夢想」を見る場合が多い。

②「ほどなく」又は具体的に「十月十日」の月日を経て子どもが生まれる。

以後その主人公が活躍する本題へと入る。

③部において「不幸予告」がある場合は話の展開の中に、その結果が組み込まれることになる。尚その主人公の活躍にあたっては祈願した神仏の加護が加わる。

「申し子譚」は大体以上にみた型をとるのだが、この「申し子譚」の中で、「申し子」という語彙そのものが、表現される場合とされない場合とがある。先に引いた天文写本「あかしの三郎」では「申(し)子」という語彙はなかったが、「古版(寛永ごろ)

絵入刊本」の「あかし」では、㉔から㉕にかけて以下のように表現され、「申子」が用いられる。

㉔ されども、御とし たけたまへば。くまのへまいり、申子をこそ、したまひける。

㉕ ほんぐう。しやうぐでんの御まへに。つや申されけるに。おにかはらを、たまはりて。ふところに、おさむる。じげんをかうぶりて。御げかうありて。

即ち、「申し子」という時、「申し子」という語彙自体を示す場合と、話型としての「申し子譚」を示す場合とがある。後者の場合に於ては「申し子」という語彙が表現されていなくても、神仏に祈願して子どもが授かった話への広がりをも「申し子」として一般的には扱っている。本稿においては、語彙を「申し子」、話型の方を「申し子譚」として区別する。

二 「申し子譚」一覧

一般的にはお伽草子と呼ばれる室町時代物語の現存する古い作品を網羅して収録したのが『室町時代物語大成』全十五巻（内補遺篇二巻）である。写本、絵巻、奈良絵本、刊本等形態を異にした物語本文が同話の異本を含めて四八〇本収められている。

まず、これら室町物語の代表作品の中から「申し子譚」を持つ作品名を指摘し、以後に室町物語成立に多大な影響を及ぼした『神道集』そして室町物語と同時代に発生した、『説経正本集』の中に「申し子譚」を求めて現存作品の「申し子譚」存続状況を整理

する。

(1) 『室町時代物語大成』の「申し子譚」

煩を厭わず「申し子譚」を含む全作品名を挙げる。五十音順に作品が収められているので、写本、絵巻、奈良絵本、刊本に分類し、それぞれ形態毎に年代順に挙げる。尚それらの推定年は、編者、松本隆信氏の解説中のそれに依った。

△写本▽

- ① 善光寺如来本懷（応永九年—一四〇二）
- ② はにふの物語（明応六年—一四九七）
- ③ あかしの三郎（天文廿三年—一五五四）
- ④ 恵心僧都（室町時代末）
- ⑤ 興福寺の由来物語（室町時代末）
- ⑥ 浄瑠璃御前物語（室町時代末）
- ⑦ 千じゆ女（室町時代末）
- ⑧ 大仏の御縁起（室町時代末）
- ⑨ 厳島の本地（室町時代末）
- ⑩ みしま（室町時代末—江戸初期）
- ⑪ さよひめのさうし（慶長ごろ）
- ⑫ 浄瑠璃十二段草子（慶長ごろ）
- ⑬ 弁慶物語（元和七年）
- ⑭ 千手女物語（江戸時代初期）
- ⑮ もろかど物語（寛永六年）
- ⑯ むらまつの物かたり（江戸時代初期）
- ⑰ 紅葉合（江戸時代初期）

- ⑮ 月みつ花みつ (江戸時代初期)
 - ⑯ 大仏の縁起 (天和元年—一六八二)
 - ⑰ 天照大神本地 (元禄ごろ)
 - ⑱ びしやもん (江戸時代前期)
 - ⑲ 文正草子 (江戸時代前期)
 - ⑳ 文正草子 (江戸時代前期)
 - ㉑ ぶんしやうさうし (江戸時代前期)
 - ㉒ むら松の物かたり (江戸時代前期)
 - ㉓ ぼん天こく (寛文ごろ)
 - ㉔ 花みつ月みつ (江戸時代中期)
 - ㉕ もろかど物語 (江戸時代中期)
 - ㉖ 玉水物語 (書写年不明)
- △絵巻▽
- * ⑳ 稚児観音縁起 (鎌倉時代後期) (申し稚児)
 - ㉑ 熊野の本地 (室町時代末)
 - ㉒ 浄瑠璃物語 (室町時代末)
 - ㉓ 中将姫 (慶長ごろ)
 - ㉔ おちくば (寛永ごろ)
 - ㉕ 梵天国 (寛文ごろ)
 - ㉖ くはうせんしゆ (寛文元禄ごろ)
 - ㉗ さ、やき竹物語 (書写年不明)
- △奈良絵本▽
- ㉘ 熊野の本地の物語 (慶長ごろ)
 - ㉙ 文正草子 (慶長元和ごろ)
-
- ④① ぶんしやう (慶長元和ごろ)
 - ④② びしやもん (寛永ごろ)
 - ④③ 千手御前物語 (江戸時代初期)
 - ④④ 文正草子 (江戸時代初期)
 - ④⑤ 宝月童子 (寛文ごろ)
 - ④⑥ おちくば (寛文ごろ)
 - ④⑦ じざり弁慶 (寛文ごろ)
 - ④⑧ 花みつ (寛文元禄ごろ)
 - ④⑨ みしま (寛文元禄ごろ)
 - ④⑩ 大仏くやう (寛文元禄ごろ)
 - ④⑪ 村松物語 (寛文元禄ごろ)
 - ④⑫ 文珠姫 (近世か)
 - ④⑬ 岩竹 (書写年不明)
 - ④⑭ さ、やき竹 (書写年不明)
 - ④⑮ 七草ひめ (書写年不明)
- △刊本▽
- ⑤① 弁慶物語 (元和寛永ごろ、古活字本)
 - ⑤② あかし (寛永ごろ、古版絵入本)
 - ⑤③ 文正の草子 (寛永ごろ、丹緑本)
 - ⑤④ 鉢かづきの草子 (寛永ごろ)
 - ⑤⑤ 月日の御本地 (寛永末正保ごろ、丹緑本)
 - ⑤⑥ ぼろぼろのさうし (寛永末正保ごろ)
 - ⑤⑦ 毘沙門天王之本地 (承応三年)
 - ⑤⑧ 花世の姫 (明暦ごろ)

⑥3 いづくしまの御ほん地（明暦二年）

⑥4 おちくぼのさうし（万治二年）

⑥5 子易物語（寛文元年）

⑥6 恵心僧都物語（寛文四年）

⑥7 まんじゆのまへ（寛文十三年）

⑥8 十二段さうし（寛文ごろ）

⑥9 いづはこねの本地（寛文末延宝初め）

⑦0 つきみつのさうし（刊年不明、古活字本）

以上の七〇本中、※印を付した絵巻③⑩「稚児観音縁起」は、松本隆信氏が「本絵巻の製作年代の上限は、経朝や吉光の活躍した十三世紀末に遡るとなし得るようである」とされるもので、「申し子譚」ではなく、「仏法のとを、つがしめむ、しかるべき弟子」を「やごとなき上人」が「長合寺観音」に祈願し授かる話である。「申し子譚」の起源を知る上で興味深い絵巻であるのでここに加えた。

写本二九本、絵巻八本、奈良絵本十七本、刊本十六本、合計七十本、異本を整理すると三七種の作品の中に「申し子譚」がみられる。『室町時代物語大成』には、四八〇本、凡そ二七〇種の作品が収められるので、約一・五割即ち二〇篇中一篇の作品に「申し子譚」があることになる。

これらの中、「稚児観音縁起」を除き、最も古い作品は、応永九年（一四〇二）写しの写本「善光寺如来本懐」であり、次には、明応六年（一四九七）写しの写本「はにふの物語」である。これ

らの「申し子譚」は、いずれも、「申し子譚」のパターン③部が簡略で、例えば「善光寺如来本懐」が、

シカリトイヘトモ、男子ニテモ、女子ニテモ、子ヲ一人モタサリキ、釈迦如来ニマウシテ、女子ヲ一人マウケヌ、名ヲハ如是御前トナツク

又、「はにふの物語」では、

しかあれども、御子一人も、ましまさぬことを、かなしみ玉ひて、神仏に、いのり給ひけるほどに、ひめ君、いてきさせ給ひにけり。

とあり、いずれも、神仏との応酬はない。「申し子譚」に焦点をあててその流れを辿る時、先述したようにこの③部における内容のふくらみ、殊に「神仏」との関わり部分が広がって物語が生成されていくことが特徴的である。

以上の「申し子譚」を持つ作品について、今少し「申し子譚」の中身の特徴づけるべく以下の観点で、分類整理してみる。

㊦ 語彙「申（し）子」が表現される作品

㊦ ①部において「前生譚」がある作品

㊦ ①部において、将来父母が死ぬ等の「不幸予告」がある作品

品 これら三項目について、それらの要素を持つ作品を挙げてみる。

㊦ 語彙「申（し）子」を持つ作品

③② 浄瑠璃物語（室町時代末絵巻）

③③ 中将姫（慶長ごろ絵巻）

①① さよひめのさうし（慶長ごろ写本）

⑬弁慶物語（元和七年写本）

⑮弁慶物語（元和寛永ごろ古活字本）

⑯あかし（寛永ごろ古版絵入本）

⑰おちくぼ（寛永ごろ奈良絵巻）

⑱びしやもん（寛永ごろ奈良絵本）

⑲びしやもん（江戸前期写本）

⑳文正草子（江戸前期写本）

㉑じぞり弁慶（寛文ごろ奈良絵本）

㉒花みつ（寛文元禄ごろ奈良絵本）

㉓まんじゆのまへ（寛文十三年刊本）

㉔花みつ月みつ（江戸中期写本）

以上、十四本、十一種の商品に見られる。

㊦「前生譚」がある作品

「前生譚」とは、具体的に次のような内容である。二作品例示する。

⑳浄瑠璃物語（室町時代末古絵巻）

薬師仏の、是をあはれに、思召し、満ずる暁、御夢想、下されけり

さて、汝夫婦が、前の世を、語らばよく／＼承れ、かねたかは、熊野の那智山に住みし、驚ぞかし、よろずの翼を、取り喰ひしが、権現の御前に、参りし故に、今人間に、生を受け、三河の国司と、むまる、なり

又、長者は、あさはか池の、大蛇なり、よろづの魚ども、虫のたね、一つも残さず、取り飲みし故により、ぜんあく子種は

さらになし

㉑千じゆ女（室町時代末古写本）

齡十八はかりなる導師一人出させ給ひて、さゝもんのぜうの枕にたちよりて、仰せありけり

汝は、前生は、七いろの、くちなわにてありしが、この御塔をすみかとして、あけくれ、鳩の子、雀の子を、餌食とせしなり、されば、鳥類の思ひつもりて、子といふものはなきなり

これらの表現量に差があるが、凡そ前生が「大蛇」「鷲」などで、小動物を餌食としたために子種がないという如き型を持つ。仏教的な因果・輪廻思想の影響が強い。その他に、

㉒浄瑠璃御前物語（室町時代末写本）

㉓浄瑠璃十二段草子（慶長ごろ写本）

㉔十二段さうし（寛文ごろ刊本）

㉕千手女物語（江戸時代初期写本）

㉖千手御前物語（江戸時代初期奈良絵本）

㉗大仏の御縁起（室町時代末写本）

㉘大仏くやう（寛文元禄奈良絵本）

㉙大仏之縁起（天和元年写本）

㉚びしやもん（寛永ごろ奈良絵本）

㉛びしやもん（江戸時代前期写本）

㉜毘沙門天王之本地（承応三年刊本）

㉝みしま（室町末江戸初期写本）

㉞みしま（寛文元禄ごろ奈良絵本）

㉟月日の御本地（寛永正保ごろ古活字本）

⑦⑩ つきみつのさうし（古活字丹緑本）

⑥⑤ 子易物語（寛文元年刊本）

⑥⑨ いづはこねの本地（寛文延宝ごろ刊本）

⑤① 文珠姫（近世初奈良絵本）

合計、二〇本、九種類の作品に前生譚が見られる。

㊦ 「不幸予告」を持つ作品

「不幸予告」についても、具体的に例示する。次のような内容のものである。

⑤⑨ 月日の御本地（寛永正保ごろ丹緑本）

（長者は千手観音に祈誓したところ）二七日に満ずる夜、観音、御まなこより光を放つて、花を二房持ち給ひて、長者の前に立ち給ひて、過去より授か（ら）ぬ子なれども、あまり汝が歎き申ほどに、これを汝に与ふべし、但し此子の四つや五つの年の頃母がむしくなるべし、それなりとも、ほしきかと、の給へば、わが命も惜しからずと申て、喜び申されければ、観音は花を長者に与へて、宮殿の内へぞ御入ある

波線部のように、生まれた子どもがある程度成長した時に、父か母が死ぬとか貧乏になることを神仏に予告されて、それでもよいということ子どもが生まれ、その後予告通りに不幸が生じるというパターンをとる。その他に、

⑦⑩ つきみつのさうし（古活字本）（書名は異なるが、「月日の御本地」と同話）——母死予告

⑪① さよひめのさうし（慶長ごろ写本）——父死予告

⑩④⑧ みしま（室町末江戸初期写本及び寛文元禄ごろ刊本）——い

ずれも貧乏予告

⑥⑨ いづはこねの本地（寛文末延宝初刊本）——子がかたきになるという予告

計六本三種の作品に見られる。

『室町時代物語大成』の「申し子譚」についてひとまずこれまでにし、以下に『神道集』（二三三二—一三六〇成立）及び『説経正本集』の「申し子譚」について、同じように調査を行い、比較検討してみよう。

(2) 『神道集』の「申し子譚」

『神道集』についても、以上の『室町時代物語大成』の「申し子譚」と同様の項目で整理してみる。調査したのは、明暦三年（一四九四）、良順上人によって書写された赤木文庫本『神道集』（角川書店刊全一卷）である。

全五十話が収められるが、その中「申し子譚」は次の五話の中にある。

六、熊野権現事、七、二所権現事 卅三、三嶋之大明神之事
卅四、上野国児持山之事 四十七、上野郡馬郡桃井郷上村内八ヶ権現事

これらの中、㊦「申（し）子」語彙を持つ語は無く、㊦「前生譚」及び㊦「不幸予告」が、「三嶋之大明神之事」にだけある。

室町時代物語「みしま」の原話で、ほぼ同じ筋になっている。伊予国三島の長者夫婦の前生は牛で宮中を荒らしたため子種がなく、子種と引き替えに貧乏が予告される。

「申し子譚」を持つ話は一割で、㊦部は簡単に述べられる話が殆どであり、「申し子譚」の基本的な型を知ることができる。

(3) 『説経正本集』の「申し子譚」

室町時代末から江戸時代初頭にかけて盛んに語られるようになった説経節は、当初は、社寺の境内や辻角などで語られ、室町時代物語を享受することができた公家や富裕な町人とは異り、身分の低い、貧しい民衆に受け入れられた。それら説経節を語った説経師が用いた正本（テキスト）が現存する。室町時代物語との交流も認められるが、説経節独自の話もある。そして「申し子譚」も存在する。

『説経正本集』（全三巻）には、四六本の正本と、附録として他本の形態であるがその詞章が説経正本と思われるもの及び説経正本に影響を与えたと思われるもの二〇本を含めて計六六本が収められる。六六本について、同種の話に整理すると凡そ三〇種になる。

「申し子譚」がある正本を同話にまとめて挙げてみよう。尚それらの中に語彙としての「申子（こ）」が表現されるものは、その旨明記する。

- ①さんせう太夫（与七郎正本、寛永ごろ丹緑本、説経山椒太夫中最古）——「申こ」あり。
- ②せつきやうさんせう太夫（佐渡七太夫正本、明暦二年刊本）——「申こ」あり。
- ③さんせう太夫（寛文七年刊本）——「申子」なし

④山庄太輔（佐渡七太夫豊孝正本、正徳三年刊本）——「申子」あり

⑤さんせう太夫物語（附録、寛文中末期刊草子型絵入本）——「申子」なし

⑥せつきやうしんとく丸（佐渡七太夫正本、正保五年刊本）——「申こ」あり

⑦しんとく丸（七太夫正本、天和貞享ごろ刊本）——「申子」なし

⑧せつきやうかるかや（寛永八年刊本）——「申こ」あり

⑨かるかや道心（寛文初ごろ刊本）——「申子」あり

⑩をくりの判官（佐渡七太夫豊孝正本、享保ごろ刊本）——「申子」あり

⑪をくり（附録、寛永後期明暦ごろ絵巻）——「申こ」あり

⑫おくり（附録、書写年不明奈良絵本）——「申子」なし

⑬まつら長じや（寛文元年刊本）——「申子」なし

⑭まつら長者（天満八太夫正本か、宝永初年ごろ刊本）——「申子」あり

⑮さよひめのさうし（附録、『室町時代物語』⑪と同本）——「申子」あり

⑯さよひめ（附録、近世初期書写奈良絵本）——「申子」なし

⑰あいごの若（万治四年刊本）——「申子」なし

⑱あいこのわか（天満八太夫正本、宝永五年刊本）——「申子」なし

⑲ゆりわか大じん（日くらし小太夫正本、寛文二年刊本）——「申子」なし

子」あり

⑳ ゆり若大じん (天満八太夫正本か、宝永ごろ刊本) — 「申子」なし

㉑ 大臣 (附録、幸若小八郎正本、慶長十四年ごろ写本) — 「申子」あり

㉒ しゃかの御本地 (天満八太夫正本、宝永ごろ刊本) — 「申子」なし

㉓ ひやうごのつき嶋 (石見掾正本、寛文中ごろ刊本) — 「申子」なし

㉔ 兵庫の築嶋 (宝永六年刊本) — 「申子」なし

㉕ 毘沙門之本地 (天満八太夫正本 「卯」年…宝永八年か…刊本) — 「申子」なし

㉖ 梵天国 (附録、慶安ごろ写本) — 「申子」なし

『説経正本集』所収作品六六本中、二六本の中に「申し子譚」がとり込まれている。作品の種類で整理すると、全く作品名が異なる「まつら長者」と「さよひめ (のさうし)」は同話であり一種と考えて、合計十一種に「申し子譚」が見られることになる。六六本の正本を作品の種類に分けると三〇種であったから、三分の一強の作品に「申し子譚」があることになり、この数値は、『室町時代物語』『神道集』に比してかなり高いことが判る。

殊に、古説経と称され、中世語りの姿をとどめている作品群、即ち「さんせう太夫」「しんとく丸」「かるかや」「をくり」「あいご若」「まつら長者」については、いずれも「申し子譚」があり、

しかも「申子」の語彙も表現されている。

今少し具体的に『説経正本集』の「申し子譚」についても、先に見て来た要素㉑「前生譚」を持つ作品、及び㉒「不幸予告」を持つ作品を指摘してみる。

㉑ 「前生譚」を持つ作品

⑥ せつきやうしんとく丸 (佐渡七太夫正本)

⑭ まつら長者 (天満八太夫正本か)

㉕ 毘沙門之本地 (天満八太夫正本)

以上三本、三種の作品に見られる。

㉒ 「不幸予告」を持つ作品

⑥ せつきやうしんとく丸 (佐渡七太夫正本) — 母死予告

⑦ しんとく丸 (七太夫正本) — 母死予告

⑮ さよひめのさうし (慶長ごろ写本) — 父死予告

⑰ あいご若 (万治四年刊本) — 母死予告

⑱ あいこのわか (天満八太夫正本) — 母死予告

以上五本、三種の作品に見られる。

こうして、『室町時代物語大成』『神道集』『説経正本集』に収められる五九六本について調査する時、比率的にみて『説経正本集』に「申し子譚」が多く、又「申し子譚」の要素として挙げた㉑語彙「申(し)子」、㉒「前生譚」、㉒「不幸予告」の三点についても、それら要素を持つ作品の比率において、『説経正本集』がやはり高い数値を持つことが判明する。

殊に、㉒「不幸予告」については、『室町時代物語大成』六本

三種、『神道集』一種、に比し『説経正本集』は五本三種にあり、しかも、この三種がいずれも説経らしい説経と称される古説経であつて、その点で説経節の位相に関わる表現要素になりうると考えられる。

これら『説経正本集』の「申し子譚」について、具体的に検討し、ジャンル説経節の位相に迫る本稿の主目的に先立って、以上の調査の過程で、明らかになってきた語彙「申し子」の意味内容とその系譜について、触れておく。

三 「申し子」の意味とその系譜

例えば、『広辞苑』（岩波書店刊）には、

もうしこ(マウシゴ)「申子」神仏に祈ったおかげで授かった子。

とあり、又『日本国語大辞典』（小学館刊）には、

もうしこ(マウシゴ)「申子」①神仏に祈願して授かった子。

※御伽草子。じぞり弁慶（未刊国文資料所収）「そもそもさいたうのむさしばう弁慶は、くま野の別当の申子なりとぞ聞える」※日葡辞書「Moxigo（マウシゴ）〈訳〉祈りにより授かった子」（以下「雑俳」等の例文あるが略）

②（①を誤用して）靈力を備えた者から生まれた子。転じて、特殊な背景を素地にして生まれ出たもの。（以下「吾輩は猫である」等の例文あるが略）

即ち現在にあつて最も一般的及び詳しい辞典である両者における「申し子」は、いずれも「…の子」と人物として説明される。

ところが、これまでの調査による「申子」の表現例をあげてみると、

③②室町時代末絵巻「浄瑠璃物語」

かすのたからをも、たれにか、ゆつるへき、申をせはやとて、そのころ、みかわに、はやらせ給ふ、ほうらひしと申やくしへ、七日こもり申されけり

③③慶長ごろ絵巻「中将姫」

とよなり、子のなき事をかなしみ、かすか大明神に申子をし給ひける

③④慶長ごろ写本「さよひめのさうし」

むかしも、申子と申事こそ候へ

等、「神仏に祈願して授かった子」という「人物」ではなく、「行為」即ち、

「神仏にお祈り申して子どもが授かるように願うこと」という意であることが判る。

もちろん「じぞり弁慶」のような例は、

③④寛永ごろ奈良絵本「おちくぼ」に、

あこをは、六かくたうのくはんおんに、あゆみをはこひて、三千三百三十三とのらいはいを奉りし申子なり

とか、『説経正本集』中、

③⑤寛永後期明暦ごろ絵巻「をくり」に、

○くらまのひしやもんに御まいりあつて申をなされける

○なにか（をくりは）くらまの申のことなれば、

等あり、「をくり」のように一本中に両者の意味で用いられる場

合もあつた。量的には、『室町時代物語大成』所収の「申子」を持つ十四本と『説経正本集』の十二本、計二十六本、二十八例について調べると、「……授かった子」の意で用いられているのは、五例にすぎなく、あとの二十三例は、「……授かるように願うこと」の意で用いられている。辞典類に、この意味が加えられなければならない。

又、「申子」の系譜、即ちこの語彙が何時ごろから使用され始めたのかについて以上の調査の範囲内での私見を述べておこう。

『日本国語大辞典』では、「じぞう弁慶」が引かれていた。これは、先に挙げた④寛文ごろ写の奈良絵本であつた。同辞典には、「日葡辞書」の例も引かれていたが、「日葡辞書」は一六〇三年の刊行であつた。これまでの調査範囲で最も古く「申子」が表現されていたのが、室町時代末絵巻「浄瑠璃物語」であつた。「申し子譚」を持つ『神道集』も含め、それより古い作品には、現在のところ「申子」なる語彙は見あたらない。①慶長ごろ写本「さよひめのさうし」には、「むかしも申子と申事候へ」とあつたが、この「申子」は、「神仏に子どもを願う行為」を指すのであつて、この語彙そのものがあつたのではないと思われる。そうした願行はかなり古くからあつた。そして、『神道集』を経て、やがて室町時代物語が大量に語られる中に「申し子譚」も多く語られ、室町時代末に至って、「申子」なる語彙が用いられるようになったと考えられる。

四 「申し子譚」に見られる説経節の位相

説経節は、説経、説経浄瑠璃とも称され、「乞食の芸能」「漂泊の芸能」と言われる。同音の仏教での「説教」と直接には関係のないところで、江戸時代の初期に至って盛んに語られるようになった。

説経節の位相を究めるにあたって、既に別稿⁽⁵⁾でも試みているように、次の三点との関わりからアプローチすることを当面の課題としている。

① 聖性(宗教性) ……時宗、高野聖、熊野比丘尼、巫女等との関わりから。

② 賤性(社会性) ……非人、奴隸、乞食、業病者等との関わりから。

③ 漂泊性 ……①と②との関わりから。

これまで見てきた「申し子譚」が、他ジャンルに比して説経節にあつてどんな特徴を持ち、それが、これら三点の位相素とどう関わるかを考えながら、説経節の位相に迫ろうとする。

既に、指摘したように、「申し子譚」は説経節において、同時代の物語類に比して、より多くとり込まれ語られたと考えられる。そして、殊に、「申し子譚」の話型中、神仏と祈願人の応酬にあつて、神仏が「不幸予告」を持つ正本が多い点に特徴があつた。

「申し子譚」を持つ説経正本中、最も詳しく、これまで挙げた諸要素を全て含んでいるのは、⑥佐渡七太夫正本「せつきやうしんとく丸」である。この「申し子譚」を中心に取り上げて考察し

てみよう。

まるが出たるついでに、汝夫婦が前生きんせうの因果お、語つてきかせ申べし、まづ長者が先の生しよは、これより丹波の国のせの郡かうりの「やまふど」なるが、春にもなれば、ぜんまいわらび折らんとて、山に猛火みやうくわを放しける。地三尺下なる虫を焼き殺し、鳥はさまざま多けれど、雉夫婦きすうの者にて、物の哀れをとどめたり。

「せつきやうしんとく丸」の「前生譚」の一部であり、長者の前生は「やまふど（山人）」とされる。（御台は、「大蛇」）

他作品では、³²驚と大蛇 ⁶池のぬし ¹²大蛇 ⁷¹⁴⁴²くちな

わ ⁸⁴⁹くちなわ ¹⁹大蛇 ⁴¹くちなわ ²¹鷹とくちなわ ⁶¹小

鷹 ¹⁰⁴⁸牛 ⁵⁹⁷⁰仙人 ⁶⁵大蛇 ⁶⁹うはばみ ⁵¹鷹（以上『室町

時代物語大成』中の「前生譚」を持つ作品）、¹⁴狩人かりうどと大蛇（まつら長者）²⁵小鷹（説経「毘沙門之本地」）

というようになっている。即ち、「牛」（みしま）、「仙人」（月日の御本地）「つきみつのさうし」を除いて、殆どが「大蛇」「驚・鷹」である。

そして説経正本にだけ「やまふど」「かりうど」がでてくる。

「長者」の前生が、天上界の「仙人」を含め、「大蛇」「驚・鷹」

「牛」であったというのは、架空物語世界の要素が強い変身譚だと言えよう。それに比べて、「仙人・狩人」を前生とする変身譚は、明らかに生活のリリティが感じられる。ぜんまいわらびをとるために猛火を放って鳥や虫を焼き殺したという表現に、先に指摘した②賤性（社会性）に関わるジャンル説経節の位相素がある。

「せつきやうしんとく丸」の「前生譚」は続いて次のような挿

話が語られる。

十二の卵かひじを生んでいた雉夫婦は猛火の中で卵を救わんと必死になる。父鳥が母鳥に叫ぶ。

「来いや来れや母鳥よ。命があれば、子をばまうけて又も見る。その子捨てて立てよ」と呼ぶ。母鳥これを聞くよりも、「情けない」とよ父鳥よ。十二の卵かひじのその中に、一つ巢くさごりなるだにも、世にも不便と思ひしに、^(A)この子においてはえ捨てまい」と、おのれと野火に焼け死する。父鳥これを悲しみて、^(B)はしを鳴らし、翼をたたき、^(B)呪ふやうこそ哀れなり。

父鳥の憎悪激しく、「けふこの野辺に火をかけたる^(B)ともがらが、生を変へであらじ。石と生変へるならば、鎌倉海道の石となり上り下りの駒に蹴られて物思へ。過去の行ひめでたうて、人間と生まれをなすならば、長者と生まれをなせ。それをいかにと思すに^(C)貧に子あり、長者に子なしと申すなり。明けても子欲しや、案じ暮らいて、さて果てよと、羽交の端を食ひ破り、死したりし一念が、（私〓御本尊の）胸の間に通じ来て、下るる子種を、中にて取つて服するによりて、それにて子種がないぞとよ。

長者夫婦に子種がない理由を、枕上に立った清水寺の御本尊が説明する箇所だが、子種がない理由として「雉夫婦の復雙譚」を挿入するのは、「せつきやうしんとく丸」と説経正本¹⁴「まつら長者」（天満八太夫正本と推測されている）との二本のみである。

この、やはり説経節にだけ織り込まれた表現においても又説経節の位相素を読み取りうる。

傍線部(A)。猛火の中に残しておくのは「卵」だけであるのだが、「この子においてはえ捨てまい」と、言ってしまう語り口の中に「子捨て」「子殺し」を日常事とせざるを得なかった人々の意識が滲出したことを感じとる。

傍線部(B)。「呪ひ」と「哀れ」に続いて、「火を放った奴らの生を変え、石ならば馬に蹴られて思ひ煩え」という激しい怒りと呪い、なまなましくぬめるような語り口の中には、虐げられた人々の怨念が込められる。

そして傍線部(C)の「貧に子あり、長者に子なし」。この表現に、「貧者」の、「長者」⇨富める者に対する屈折した、しかしこのことによってしか、優位に立つことができない、切実な願望を秘めた思いを読みとらねばならないだろう。

生まれながらにして貧富の差を自明の理として身分的下層の地位に生まれた人にとって、子どもだけは平等に与えられる。どんなに働いても、どんなに切望しても得られない物質的な財産に比して、子どもだけは天が授け給う。それは、日本における子宝思想の系譜の中に根付いて来た貧者にとつての生きる支えであったのだろう。全ての人々に平等に与えられる筈の子どもが「長者」には与えられず、「明けても子ほしや、暮れても子ほしや」と「案じ暮らいてさて果てよ」と願う「不平等さ」の中に、物質的不平等さへの痛切な逆襲の論理を読みとることが可能になろう。そこに又説経節の位相を見ることが出来る。

「せつきやうしんとく丸」の「申し子譚」はまだまだ続き、長者夫婦が御本尊に、多くの献納物を納めることを願い出る。子種

と引き替えに献納物を納める表現は説経に限らず他本にも多く存在する。寺社を維持するための実利的効果と結びつく行為であって、寺社の霊験の宣伝でもあった。中世末期における民衆と寺社との結びつきを伺えて興味ある点である。

多くの献上物を差上げた結果、やっと本尊は願いを聞き入れるのだが、ここで「不幸予告」が行われる。

有難や御本尊な、内陣よりも揺るぎ出で、長者夫婦の間に立ち、「夫婦の者どもに授くる子種はなけれども、余り大願こむるにより、子種を一つ求めたり。^(A)この子生れ、七歳になるならは、父にか母にかな、命の恐れあるべきが、明け透け好め」と、夢の間に^(B)お告げある。長者夫婦の人々は、夢覚めてかっぱと起き、「^(B)宵にまうけ、あすはむなしくなるとも、子種授けたまはれ」。「さあらば子種得さすべし。すなはちこの子男子にてあるべき。下向申せ」と、夢の間に^(A)お告げある。

傍線部(A)が不幸予告であり、(B)部がそれに対する答えであるが、「子どもが宵に授かりしその次の朝に死んだとしてもかまいません。ですから子種を授けて下さい」という、まさに命にかえての子種の切望を我々はどうか受けとめたらよいのか。

「申し子譚」の中のこの「不幸予告」は、先に挙げたように、『室町時代物語』中には、⑪「さよひめのさうし」、⑤⑨「月日の御本地」、⑦⑩「つきみつのさうし」、(⑤⑨と同話)、⑩④⑧「みしま」、⑥④「いづはこねの本地」にあった。これらのうち⑪は、説経節に同話の「まつら長者」及び「竹生島の本地」等があつて、むしろ説経節において有名な話であつた。又⑩④⑧は、「貧乏」、⑥④は、生まれた子が

「仇」になることが予告され、不幸は「死」ではない。⁽⁵⁹⁾⁽⁷⁰⁾が、既に引用したように「死」が予告される。

『説経正本集』においては、⑥「せつきやうしんとく丸」、⑦「しんとく丸」、⑮「さよひめのさうし」、(『室町』⑪と同本)、⑰「あいご若」、⑱「あいごのわか」にあった。

説経節に特に多いということではないけれども、『室町時代物語』の作品数の多さに比すれば、説経節中の代表作「しんとく丸」と「あいごの若」とに「不幸予告」があることは、説経節の特徴と認めてよからう。

今少しく⑥「せつきやうしんとく丸」以外の説経節の「不幸予告」部の表現を見てみよう。

⑦「しんとく丸」(天和貞享ころ刊本)

有難や御本尊は枕^{はぞん}神に立給ひ、「いかにのぶよし」此子三歳に成ならば、父か母かに命のおそれ有べし。御台夢^{みだいむ}の心地にて、「^(B)其子今宵生まれ、明日なりとみづからが」命取給へ。男子成共女子成共、一人授けたび給へ。」

⑰「あいごの若」(万治四年刊本) 及び、

⑱「あいこのわか」(天満八太夫正本、宝永五年刊本)。両書には若干の校異がある。⑰の本文を挙げ、下部()部に⑱の異同を示す。

〔長谷寺の観音に祈誓、夢のお告げがあり一旦断わられる〕清平夫婦はかつばと起きさせ給ひつ、(⑱は「させ給ひつつ」なし)「こはなさけなき利生かな、^(B)一人の子種なきならば、われら夫婦が(の)「命とらせ給へ」とて、又三日ぞこもらる、。

有難や御本尊は枕^{はぞん}かみに立給ひ、「清平に(いかに清平、汝らに)子種はさらにあらねども生涯にかけてなげく事、扱もくふびん也。^(A)此子三歳に成ならば、夫婦の(が)内に一人、一命(⑱「命」だけ)を取べし。清平いかに(⑱「清平いかに」なし)と告げ給ふ。御台夢^{みだいむ}の心地にて、^(B)「其子今宵に生れ、明日也共、みづから(が)「命を取給へ」との給へば、御本尊は聞召、子種(を)授け消すがごとくにうせ給ふ。

「しんとく丸」と「あいこの若」では、話の展開は全く異なるけれども、この「申し子譚」において極めて類似した表現構造を持つことが判る。⑥「せつきやうしんとく丸」では、「七歳」であった不幸予告が、⑦「しんとく丸」では「三歳」になり、むしろ別話「あいこの若」に内容が近い。

「あいこの若」においては、傍線(B)を付したように「一命との引き替え」が二度も語られ強調される。「申し子譚」に至る「あいこの若」の経緯は、宮中での競争者「六条殿」との「宝比べ」の際、清平は物では勝ったものの、五人の子を持つ六条殿に、子なき故に敗れ、みかどから「子ほどの宝よもあらじ」「いかに清平、子なき者は一代者として、御殿にはかなふまじ。はや立ちのけ」と命じられ、歎きあまつて長谷寺に参るという前話がある。

「子宝思想」は説経節以外にも見られるけれども、「其子今宵に生れ、明日也共、みづからが一命取り給へ」という激しさは、説経節に特筆される表現であり、その背景に、説経を語り、受け入れた人々の、子どもに入れ込む祈りにも似た願いを把むことがで

きよう。

「貧に子あり。長者に子なし」の思いは、「わが命にかへ子種授け給へ」という祈りに高揚することにより、「子宝」への執念は極限に達する。物語の展開においては、「長者」が子種を授かることになるのだが、「申し子」語りは、物語のストーリーとは関係のないところで、貧者の願いの丈を噴出させる。

別稿「峠越え辿る細道駁道」⁽⁶⁾においては、説経の「道行」をとりあげ、「漂泊性」の位相を確かめたが、かかる説経「申し子」語りの特徴は、ジャンル説経が内包する「賤性（社会性）」の位相を焙り出すものであった。

まとめ

与えられた紙幅も尽きた。若干のまとめをして拙稿を了える。中世における神仏と人との親しい関わりの中で、封建制という「家」存続の必要性とも結びついて、「申し子」（子どもが生まれるよう神仏に祈願すること）が行われるようになった。そして室町時代に至って物語世界の中に「申し子譚」が類型にまで成長して取り込まれるようになり、やがて「申（し）子」なる語彙も使用され始めた。そうした物語世界の「申し子譚」を調査し比較検討する時、「前生譚」「不幸予告」語りの中に、説経節にのみ特徴的な語り口を証しえた。それは「賤性」に関わって来る説経節の位相を焙り出す。その位相には、日本における子宝思想の系譜にあって「貧に子あり、長者に子なし」に象徴される、子どもだけ

を宝として生きようとした貧者の思いが込められる。そして、「命にかへ子種授け給へ」。ここには、虐げられた己の生と引き替えに、生まれ来る己の分身に幸せへの回帰を切望する賤者の願いが奏でられる。

我々は、「申し子譚」によって焙り出されたかかる説経節の位相を確認しながら、現代日本の回帰すべき未来を求めて、改めて「子宝思想」の果たす意味を考えねばならぬ。

富める「長者国」日本において、未来を託しうる「確かな子ども」は不在ではないのだろうか。

注

- (1) 新潮日本古典集成『説経集』所収本文。
- (2) 横山重、松本隆信編、角川書店刊。
- (3) 横山重編、角川書店刊。説経正本四六本、説経正本に關係深い作品を附録として二〇本収める。
- (4) 『室町時代物語大成』の本文。一部漢字に改めた。以下の引用文も同じ。尚、説経の引用文は『説経正本集』に依った。
- (5) 「絵巻『をくり』の成立をめぐって」（芸文東海11・12号所収）
- (6) 「中部大学国際関係学部紀要No.4」所収。